

13. 企画山行「尾瀬ひるね旅」

1) 日程

1985年06月02日～06月05日(前夜発3泊4日)

2) コース

第1日 鳩待峠—アヤマ平—富士見峠—尾瀬ヶ原—中田代十字路

第2日 中田代十字路—見晴新道—燧ヶ岳—熊沢の田代—裏燧
—中田代十字路

第3日 中田代十字路—富士見峠—皿伏山—大清水—尾瀬沼
—中田代十字路

第4日 中田代十字路—尾瀬沼—三平峠—大清水

3) 記録

尾瀬の細道

水野 芭蕉

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり…」などと受験参考書で覚えた一節を思い浮かべ、予もいずれの年よりか、片雲の風にさそわれて山行の想いやまず。この季節になると、尾瀬の春の空を想いながら山靴を手入れし、家財道具をザックに詰め込みながら湿原の風を想う。

06月02日

旅立ち

ここ数年梅雨入り直前の晴天期をねらって尾瀬に通っている。今年は下田代十字路をベースに、お気に入りのコースを春風に吹かれながら昼寝をして回るという計画を立てた。会社の帰りがけに、この日のために貯めておいた代休の申請書を上司の机の上においてきた。週末の新宿駅の雑踏の中、家路を急ぐ人々の流れに逆らうように、でかいザックを背にひとり上野方面に急いだ。

人波をひとり分けゆく春の宵

アヤマ平

鳩待峠で朝食をとりながら夜が明けるのを待つ。タクシーの相乗りは楽でよかったのだが、少々早く着きすぎてしまった。空が白み始める頃、山の鼻や至仏岳へ向かう大勢の人たちに背を向け、ひとりアヤマ平へ歩き出す。

春の空明けゆく先は尾瀬ヶ原

所々小さな雪溪の残る樹林の道をのんびり行くうちに、最初の高層湿原の横田代に出る。緩やかな尾根の傾斜に広がる大きな湿原のふちに沿うように、小ぶりの水芭蕉が点々と咲いている。木道を行く自分の靴音だけが響く。湿原の中ほどのベンチで一休み。高曇りで陽が隠れているので風が冷たい。昼寝には早すぎて再びのんびり歩きだす。木道は灌木帯の中を緩やかに上下しながら続く。日陰のところは、木道がま

だ雪に埋まっている。陽が差し始め暑くなりだした頃アヤメ平に着く。

ここは山上の湿原といった雰囲気です。明るく眺望がよい。誰も来ないので木道にゴロリと横になる。陽射しは暑く眩しいが、空気は暖まっておらず冷たく心地よい。目をつぶりウトウトしてきた時何かかすかな音が響いてきた気がした。遠い汽笛のような「ポー」という音や、笛のような「ピー」、「ヒュー」という音が断続して聞こえるような気がする。起き上がって周りを見ても何も変わった様子もなく、ましてや汽車や船の汽笛が聞こえるわけもなく、気のせいだと思い再び横になる。しばらくすると今度は風に乗って流れてくるように聞こえる気がする。ゆっくりと起き上がってじっと聞き耳を立てていると、微かだが確かに何か聞こえてくる。どうも風が吹いてくると聞こえるようだ。風を待ちながら、注意して音の聞こえてくる方向を探ると、そこには湿原への立ち入りを防止するための、ロープがまだ張られていない塩ビのパイプが立っていた。風が吹いてくるとパイプの長さの違いや、ロープを通す穴の位置の違いのせいで、笛のように色々な音で鳴るらしい。何故か大声で笑いたしたいほど楽しい気分です、木道の上へ大の字になった。

湿原に春風の吹く子守唄

人の話し声に気が付き時計を見るとしばらく眠っていたようだ。すっきりした気分です歩き出す。富士見峠に近づくと人と会うようになる。分岐を尾瀬ヶ原に向い石ころの道を下って行く。尾瀬ヶ原に下りついたところで一休みする。ここは至仏岳をバックに小さな流れに沿って咲く水芭蕉が美しい、好きな場所の一つだ。本日最後の静かな尾瀬を楽しんだ後、意を決して尾瀬銀座へ。

下田代十字路にテントを張り、早めに夕食をとって、夕暮れの写真でも撮ろうと缶ビールを片手に、すでに人のいなくなった尾瀬ヶ原へ木道を辿って行く。丁度良いあたりにはベンチがあると思ったら先客がいた。どちらからともなく声をかけて話を聞くと、わざわざ大阪から来たとのこと。歳も同じとわかり、昔からの知り合いのようにすっかり話し込んでしまった。足の悪い親父さんに尾瀬を見せてやりたくて連れてきたとのことだった。写真もあまり撮らないうちに陽もすっかり落ちてしまい、「じゃあまた」とだけ言って薄暗くなった木道を下田代十字路に戻った。

06月03日

熊沢の田代

今日の行程は長いのでなるべく早く出発する。木道からそれて見晴新道に入ると人気がない樹林の道となる。道は薄暗く窪状を辿るようになり、だんだん雪が多くなりいつしか雪の切れ目はなくなり雪溪の上に行くようになる。それにつれて傾斜も増してくる。滑らないように注意しながら確実に登る。時々振り返るが、谷筋なので景色は仕切られて見えないが、ドンドン高度が増していくのは解る。谷は次第に狭まり再び土と雪の上を交互に行くようになり、道は尾根に取りつくようになる。

尾根上に出ると一気に展望は開けたが、高曇りで陽射しはない。まあ暑くなくていい

やと柴安崑まで一登りする。人はほとんどおらず一人で岩を一つ占領してひっくり返る。ここまで一気に来たが今日は快調だ。一休みして俎崑へ。ここからの下りはいつも雪が残っていて手ぶらでは手強いのだが、今回はフィックスロープがあり安心だ。半分滑るように下り上り返して山頂へ。着くと間もなくガスも上ってきて視界はゼロ。長居をしてもしょうがないので早速裏燧方面へ下ることにする。

下り始めてすぐ最初の大きな雪渓が現れる。トラバースしながら下を見ると、雪渓はそのままガスの中に消えていて、あまりいい気分はしなかった。下るにつれてガスはだんだん薄れて二つ目の雪渓へ。ここは向かい側の藪に入口の目印を捜しながら下って行く。かなり下ったところで対岸の木立に赤テープを見つけてトラバース。藪を抜けるとそこからは、残雪の樹林帯を踏み跡と赤ペンキを追いながら下って行く。熊沢の田代が見えてくると階段状の木道が現れ、下りついた小さな池塘脇の木道に腰を下ろし、夏みかんを一つ。そしてゆっくり横になる。高曇りの空に風が肌寒いぐらいだ。しばらく横になっていると、人の気配で鳴き止んでいた蛙たちが、再び鳴き始める。蛙の姿を見つけようと動き回るが今度は鳴き止まない。蛙たちに自分の存在を受け入れてもらえたような気がして楽しい気分です再び横になる。

雪解けの池塘で蛙の子守唄

雨がパラパラ落ちてきて目が覚めた。傘をさしながら木道をブラブラ歩き出す。樹林帯に入り、下るにつれて道が悪くなる。中途半端な残雪で滑り易い道、雪解け水で川のようになってしまう道、泥沼のようなぬかるみの道、いやになっちゃうよななどと言いながらも、これでこそ尾瀬だなどとひとり納得して、実は結構楽しみながら下って行った。

この時期は、御池田代の水芭蕉群が一番きれいではないだろうか。天気も晴れてきて、一面の水芭蕉を楽しみながらゆっくりと昼食をとる。

道は燧ヶ岳の山麓を緩やかに上下しながら巻いて行く。途中 樹林帯の中にぽっかり開けた湿原や、小さな池塘に合わせたように咲く小さな水芭蕉、この裏燧と呼ばれる一帯はいつも心静かな山歩きができるような気がする。

碧空を映して深し小池塘

いつの間にか周りの木立が高くなり、太い幹の樹木が多くなると三条の滝への分岐に出た。ここからは観光客気分です滝巡りをし、帰りがけに温泉小屋で缶ビールを飲み乾し、上機嫌で下田代十字路へ向かった。

06月04日

大清水平

今日は平日なのでずいぶんテントの数も減ったなと思いながら、キャンプ場の裏から富士見峠への道に入って行く。天気も良く木々の新緑が美しい。まだ出たての葉は陽の光が透けるほど薄く、触れると何とも優しい柔らかさだ。

朝の陽を緑に染める若葉たち

谷川が開けて一汗かいたところで富士見峠に出る。人声のする小屋には寄らず左の皿伏山方面へ。パラポラアンテナを過ぎ小さな湿原で一休み。最後の眺望を楽しんで、白尾山から一気に下る。結構急な上ぬかるんだ道が滑り易い。初めて尾瀬に入ったのはこの道からだ。当時は泥沼のような道に難渋したが、何年か前に作られた立派な木道のおかげで苦労と共に、木の枝につかまりながら道の縁を辿ったり、木の根や倒木の上をバランスをとりながら伝い歩く楽しみもなくなってしまった。薄暗い樹林の中を登って皿伏山へ。しかし展望もないので通過し、いくつかの小さな湿原を見送って大清水へ。

大清水はいつも期待を裏切らない。誰もいない広い湿原に細く続く木道、湿原の周囲には白樺の柔らかな新緑、池塘では映り込んだ青空と白い雲をバックに咲き誇る水芭蕉たち。

水芭蕉碧空高く咲き競う

木道に横になると青空が眩しく目お開けていられない。手をかざしながら空を見ると色々な形をした雲が、少しづつ形を変えながら風に吹かれて飛んでゆく。その様はまるで目で見る音楽のようだ。暖かい陽射しと心地よい風に暫しウトウトとした。

春風に流れる雲の子守唄

尾瀬沼に出る樹林帯にはまだ雪が残っており、赤いテープと踏み跡を追うように行く。沼を回る道には平日とは言えさすがに人が多い。まあこれくらいなら我慢しなくてほしいながら白砂乗越へ登って行くと、先日の彼と行き会った。「やあ」とだけ声を掛け合っただけだったが、ゆっくり、ゆっくり歩く親父さんを見守りながら付き添う彼の照れたような笑顔が心に残った。

06月05日

尾瀬沼

朝霧で何も見えなかった尾瀬ヶ原も、日の出とともに霧は、尾瀬ヶ原に詰め込まれたような雲になり、その上にポツカリと至仏山が浮かんで見える。その至仏山に背を向けて、樹林の道をゆっくりと尾瀬沼に向けて歩き始める。マイペースで今回の山行の感傷に浸りながら行くと、集団登山の女子高生の列を見つけた。急いで道を逸れて背を向けていたにもかかわらず、「コンニチハ」が群れを成して襲いかかってくる。仕方なしに応じているうちに何故か気持ちが優しくなっていくような気がした。

沼尻から尾瀬沼の開けた空間に出る。五月晴れの空、沼の深い緑、沼を囲うような眩しい新緑、その上に立つ燧ヶ岳、そして沼を回る道沿いに次々と開ける大きな湿原、そこに咲き競う花々、この陽気なほどの明るさ、眩しさ、やはりここが尾瀬の中心なのだと思う。

尾瀬沼から分かれて三平峠の樹林の中の登りへ、尾瀬沼に何か忘れたような気分ですべて峠を越える。尾瀬を出るといつも何か違和感があったのだがふと思い当たった。尾瀬

には埃がないのだ。この下りの砂埃のような埃臭さが無いところなのだ。尾瀬がいつも独特の雰囲気を持っているように感じてきたのは、このせいかもしれないとひとり納得した。

下るにつれて蒸し暑くなってくる。いつしか梅雨明けを思わせるような陽射しになっている。ついさっきまでいた尾瀬は、緑あふれる春だったのにといいながら、一足早く夏へ下って行った。

青き香を尾瀬に置ききて夏の空

4)コースタイム

年月日	時間		場所	備考	
1985.06.02	04:40	着	鳩待峠		
	05:00	発			
	06:20	着	横田代		
	07:15	発			
	07:50	着	アヤマ平		ひるね
	08:30	発			
	09:05	通過	土場		
	09:15	通過	長沢頭		
	09:50	着	尾瀬ヶ原		
	10:20	発			
	10:50	着	下田代十字路		
	13:00	発	散策		東電小屋方面橋流失
	15:00	着			
	1985.06.03	04:00	起床		
05:30		発			
06:52		通過	大岩		
07:30		通過	温泉小屋分岐		
07:53		着	柴安嶺		
08:15		発			
08:30		着	俎嶺		
08:35		発			
09:20		着	熊沢の田代	ひるね	
10:15		発			
11:05		着	広沢田代		
11:45		発			

	12:30	着	御池	
	12:55	発		
	14:48	着	三条ヶ滝	
	15:00	発		
	15:40	着	温泉小屋	
	15:50	発		
	16:20	着	下田代十字路	
1985.06.04	04:00	起床		
	05:40	発		
	07:10	着	レスト	
	07:20	発		
	07:43	通過	富士見峠分岐	
	08:03	通過	パラボラ	
	08:05	着	レスト	正面に燧ヶ岳を望むベンチ
	08:30	発		
	08:42	通過	白尾山	
	09:28	通過	鞍部	
	09:38	通過	水場	
	09:48	通過	皿伏山	
	10:18	通過	小湿原	
	10:43	着	大清水平	
	13:00	発		
	14:30	通過	沼尻	
	14:39	着	白砂湿原	
	14:50	発		
	15:00	通過	白砂峠	
	15:45	着	下田代十字路	
1985.06.05	05:00	起床		
	08:35	出発		
	10:50	着	大江湿原	
	11:10	発		
	11:50	通過	三平峠	
	13:30	着	大清水	